

H29年度看護学教育ワークショップ

【報告1】

全国看護系大学のCQI活動に学ぶ CQI戦略

2017年10月26日

千葉大学大学院看護学研究科
看護学教育CQIモデル開発と活用推進プロジェクト

吉田澄恵・吉本照子・野地有子・
和住淑子・黒田久美子・錢淑君



看護学教育のCQI(継続的質改善)モデル開発と 活用推進 事業

<目的>

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデルを開発し、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援する。

<第1期 H28-29の取り組み>

- 研修事業(看護学教育WS、看護系大学FD企画者研修他)
- 各大学向けCQI支援 (FDコンサルテーション他)
- 全国調査

本報告の目的

平成28－29年度の事業をもとに、
全国の看護系大学の多様なCQI活動の状況から
導き出したCQI戦略に重要なことを報告する。



1. 平成28年度看護学教育ワークショップから

テーマ: 卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか
～大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦～

全日程参加 70大学

- CQIを推進するのは、自分たち教員である
- 組織の特徴や社会的役割などによって、促進要因・阻害要因にちがいがある
- 学生が参加できるようにする工夫が必要
- CQI推進プロセスには、いくつかのバリエーションがある

2. 協力大学との関わりから

<A大学>

これまで培われてきた関連病院との臨地実習指導体制を、学士課程の看護学教育として、自大学の特徴となる先駆的取り組みとなるように、見直し始める。

⇒教員と臨床指導者の合意形成

<B大学>

さまざまな教育の評価活動を、AP・CP・DPと照合していなかったことに気づき、自大学の創設時からの伝統と特徴を価値づけながら、教育の見直しを始める。

⇒評価活動への教員の取り組み合意形成

<C大学>

WSで獲得した「到達目標2011」の活用方法を知恵に、モデルコアカリを契機として他学科協力を得て、カリキュラム運営を模索する。

⇒複数学科の教員の合意形成

<D大学>

WS後自大学の「到達目標2011」の活用と自大学のDPの関連への疑問、DPに基づく科目の連関の疑問の確認に行動し始める。

⇒組織的取り組みにするアクションプラン検討



<E大学>

地域貢献大学として、CQIを推進したいと考え、事務方と行政、住民、学生の参加を得て、教員の合意形成を諮りながら、取り組み始める。

⇒組織的取り組みにするアクションプラン検討

<F大学>

統合実習や、実習フィールドでの卒業生評価から、DP達成のため、1年次の基礎看護学科目における他分野教員参加による授業改善に取り組み始める。

⇒組織的取り組みにするアクションプラン検討

<G大学>

FDマザーマップ®をもとにFDニーズ分析を行い、教育観と組織のあり方の検討用に開発されているFDコンテンツを用いて、組織文化創造に向けたFD研修に取り組む。

⇒教員と組織トップリーターとの合意形成

<H大学>

卒業生就職が期待されて協力する病院での初めて臨地実習。学生のつかみ取ったものも施設の評価も概ね良好。これを活かすために、他学科との合同FDとは別の企画を検討中。

⇒教員間、教員と臨床指導者、教員とトップリーターの合意形成

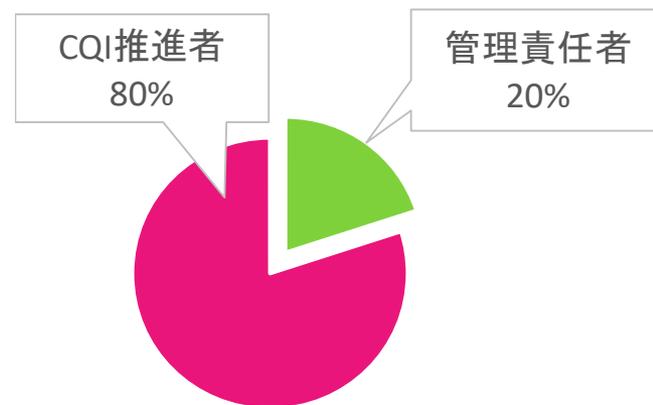
☆当センターの支援は、多様な大学の状況を知る立場から、各大学の特徴が浮かび上がるような質問やフィードバックが主。

⇒CQIには、自大学の特徴をつかむための相互支援が重要。

3.CQI全国調査から

報告書:配布資料にあり

対象:JANPU会員校255校(省庁立含む)の
管理責任者1名とCQI推進教員4名
期間:2017年2月20日~4月11日
回収数: 185名
回収率 14.6%



回答者の構成

自大学におけるCQI推進上の役割認識 N=185

CQI推進上の役割認識	人	%
看護学の教育責任者	40	21.6%
FD委員会等の責任者	16	8.6%
教務委員会等の責任者	35	18.9%
学部等の長がCQI推進教員と期待する教員	45	24.3%
カリキュラム改正等の委員会の責任者	16	8.6%
学生支援等の委員会の責任者	16	8.6%
わからない	17	9.2%

・“CQI推進教員として期待されている”が主。
・CQI推進教員として調査協力依頼を受けたものの、“わからない”も一定数あり。

CQIの前提: 職業人養成・社会貢献としての機能

◆H17年中教審答申区分でみる自大学の機能の優先順1から3位の選択数

n=185人(%)

大学の機能	1位	2位	3位
高度専門職業人養成	69 (37.3%)	39 (21.1%)	15 (8.1%)
幅広い職業人養成	44 (23.8%)	31 (16.8%)	26 (10.8%)
社会貢献機能(地域貢献、産学官連携、国際交流等)	29 (15.7%)	54 (29.2%)	56 (30.3%)
世界的研究・教育拠点	20 (10.8%)	6 (3.2%)	9 (4.9%)
特定の専門的分野(芸術、体育等)の教育・研究	11 (5.9%)	8 (4.3%)	14 (7.6%)
総合的教養教育	7 (3.8%)	23 (12.4%)	18 (9.7%)
地域の生涯学習機会の拠点	4 (2.2%)	19 (10.3%)	26 (14.1%)
未回答	1 (0.5%)	5 (2.7%)	28 (14.6%)

CQI活動の実施状況と活用

◆看護学教育のCQI活動の実施状況と活用

(活用の多いものと少ないもの抜粋)

CQI活動	実施有 (%)	活用有 (%)
実習機関・施設等へのヒヤリングや協議	90.3	79.5
教育の改善に焦点をあてたFD研修	96.2	75.7
在学生による個別の授業評価	95.7	74.1
自己点検・自己評価の実施	93.0	71.4
AP・CP・DPの見直し	89.7	69.2
カリキュラム編成・科目設計の見直し	91.4	69.2
地域の福祉施設の人材養成ニーズ把握	31.9	18.9
同窓会など卒業生組織との協議	40.5	15.7
地域の有力者・有権者等へのヒヤリングや協議	30.8	13.0

大学評価ですでに
実施していること
は、活用している。



すでに取り組んで
いることをどう活か
すか？

地域からの評価や
卒業生の評価は、
実施も少ないが、
活用も少ない。



地域貢献重視との
ずれ？

CQIの取り組みの促進要因

◆全教員・ほとんどの教員が取り組んでいる場合の取り組みの促進要因

取り組みの促進要因	%
全教員参加の定例会議がある	89.9
必要時招集される全教員参加の会議や意見交換の場がある	54.6
科目・領域責任者を通じた伝達と共有がある	53.8
委員会組織を通じた伝達と共有がある	48.7
CQIのワーキンググループ等が組織化され活動している	47.9
学部・学科等の長のリーダーシップがある	39.5
カリキュラム・教務・FDなどの委員長リーダーシップがある	27.7
教育を重視する組織文化・風土がある	21.0
教員が自由に教育について話し合う機会がある	0.0

⇒ CQIの取り組みの促進には、教員の話し合う場が必要

CQIの促進要因

◆看護学教育CQI活動の促進要因 (60%以上の項目)

CQIの促進要因	%
日本看護系大学協議会 (JANPU)からの情報	83.2
文部科学省からの看護学教育への提言があること	76.2
看護学教育に関心の高い特定の教員の存在	74.6
臨地実習施設からの要望	66.5
看護系学会参加により得られる情報	62.7
自己点検・自己評価があること	62.2
委員会による組織的取り組み	62.2
他大学経験を有する教員がいること	60.0

外部の指針・情報がCQIの契機

◆組織的取り組みに関する促進要因の 取り組み群と一部取り組み群の比較

組織的取り組みに関する促進要因	取り組み群	一部取り組み群	P値
開学の理念	43.7	19.7	.001
大学の組織文化	42.9	13.6	.000
設置主体からの働きかけ	23.5	6.1	.003
自己点検・自己評価があること	70.6	47.0	.002
大学評価を受審すること	47.9	31.8	.034
学部・学科の長のリーダーシップ	52.9	51.5	.852
委員会による組織的取り組み	69.7	48.5	.004
CQIに活用できる研究費とは異なる資金	12.6	3.0	.031

学長・学科の長のリーダーシップは、組織的取り組みの促進要因とは限らない

CQIにリーダーシップを発揮している教員は、。。

◆自大学のCQIにリーダーシップを発揮している教員

自大学のCQIにリーダーシップを発揮している教員	人	%
看護学の教育責任者	136	73.5
教務委員会等の責任者	99	53.5
FD委員会等の責任者	95	51.4
看護学分野の教授	87	47.0
カリキュラムの改正等の委員会の責任者	84	45.4
理事長・学長などの大学組織全体の責任者	58	31.4
学生支援等の委員会の責任者	38	20.5
看護学分野の准教授・講師	35	18.9
看護学分野の助教	15	8.1

CQI活動推進するために行っていること

◆自大学のCQI活動推進のために行っていること(自由記載の抜粋・要約)

【責任者・推進者としてのCQIのための組織化】

《CQIのための組織形成と機能強化》

【委員会等の長としてのCQIのための運営】

《カリキュラム・教育内容・教育力強化のための委員会運営》

【一教員としてのCQIに向けた教育活動】

《領域を超えた教育内容・方法の情報・意見交換》

《領域内での科目・授業についての意見交換》

《授業評価の活用と授業方法の工夫》

《学生との協働関係による教育の質改善》

《CQIを意識した会議参加と周囲への働きかけ》

【CQIのための自己研鑽】

《看護学教育に関する情報検討》

《看護学教育を超えた高等教育の情報検討》

↓

一教員としての取り組みを組織的な取り組みに結び付けるには？

全国調査からわかったこと

1. 専門職教育（professional discipline）としての人材育成と地域・社会貢献のためのCQIを重視していた。
2. 大学評価項目（自己点検・自己評価、授業評価、FD研修、AP/CP/DPの見直し）に関する取り組みをCQI活動として実施していた。
3. CQIの促進要因として、教員間の話し合いの場、外部指針（文科省・JANPU等からの情報、「到達目標2011」、指定規則改正等）があげられた。
4. 一人ひとりの教員が取り組んでいる質改善活動を組織的なCQIにする工夫が必要である。

まとめ：看護学教育のCQI戦略のヒント

- 外部からの指針は、CQIの契機になる
- 職業人養成と社会貢献により、地域の協力が得られる
- 「大学評価」、「自己点検評価」等への取り組みは、CQIに活用できる
- 教員一人ひとりがCQI推進者としての自覚をもつための工夫が必要
- CQI推進のための戦略を考える場（教員内部、大学内部の合意形成を含む）が必要
- 自大学の特徴や取り組みたいことをつかむためには、大学間の相互支援が必要

